

壊す言い方はよくない。」と珍しく真顔の先生に窘められ、ハッとしたことがある。先生は踏み込んだ交わりを一瞬で実現されたが、個々人の幸福と尊厳、延いては人類の平和共存をいつも熱く思い続けておられた。先生に依存してきた私たちにはそれだけに頼りないところがあるが、先生が理想

とされた差別や抑圧のない共生の世界の実現に向けて進まねばならない。重要なことは学問だけではないという当たり前のことをリアルに教えてくださったのが、私にとつての湯川先生である。先生のことは、今でも本当は現在形で語りたい。

湯川武先生の思い出

——エジプト・スーダンでのエピソードを中心に——

栗田 禎子

千葉大学文学部教授

湯川武先生とは、「NIHUPログラム・イスラーム地域研究」の中の、先生が

代表を務められていた研究グループ「イスラームの知と権威」(早稲田大学拠点)に加わらせて頂いたおかげで過去数年間にわたって一緒に仕事をさせて頂く機会があった。また特にこの研究グループの一環として私が始めた読書会『アラブ・イスラーム哲学における唯物論的諸傾向』(フサイン・ムルワ著)に、先生も当初から熱心に出席して下さいだったので、読書会後の懇親会等でもたびたび同席させて頂くことができた。このように先生とのお付き合いはごく最近まで続いたのだが、ここでは約三〇年前、先生と初めて知り合った——それはエジプト・スーダンにおいてであった——頃の思い出を振り返ってみたい。

カイロの湯川先生

湯川先生に初めてお目にかかったのは一九八五年春、カイロにおいてである。当時先生は在エジプト日本大使館に専門調査員として赴任しておられ、修士課程を終えて日本から留学してきたばかりの私が大使館を訪ねると温かく歓迎してくださった。カイロ事情に精通していた故鈴木登さんがたしか、(それまで専門調査員といえば若手の、いわば「駆け出し」の研究者が多かったのに対し)湯川先生は初の「大学教授の専門調査員」なので大使館の中で一置かれ、大使にもとても頼りにされている、というようなことを言っていたのを記憶している。実際、私自身強い印象を受けたのは、湯川先生が決して「腰掛け」的・便宜的(！)に専門調査員をやっているの

ではなく、(近代以前のイスラームの歴史が専門のはずであるにもかかわらず)現代中東の政治・思想状況にも非常に生き生きとした関心を抱いて真剣に観察・分析をされている、ということだった。資料収集のためにやはりカイロを訪れていた飯塚正人さん、東長靖さんと共にご自宅に呼んで頂いて夕食をご馳走になり、たまたまイラン革命のことが話題になった際、湯川先生が「でも、同じことがここ(エジプト)でも起きるかもしれないよ。その時は、イラン以上に凄惨ことになるかもしれない」と言っておられたのは今でも耳に残っている。当時、先生は、(おそらく鈴木登さんとの意見交換にも大きな刺激を受けて)ムスリム同胞団の動向に深い関心を抱いておられていたようである。

また、(やはり「大学の歴史の先生である専門調査員」湯川先生がいるからこそできる贅沢な企画として)日本大使館主催で、湯川先生の引率のもとに希望者がカイロを半日見学する「歴史ツアー」のような催しがあり、エジプト到着後まもない私もこれ幸いと参加させて頂いたのも貴重な思い出である。湯川先生は「これはちょうどヨーロッパでいえばロミオとジュリエットの頃の建物です。——ヴェローナなんて、当時は小さな町だったんでしょね」とか、「ああいう風にミナレットが鉛筆みたいに立ち並んでいるモスクはオスマン時代のものが多いです」といった語り口で、さりげないようについて歴史的洞察と該博な知識に裏打ちされた説明をして下さった。参

加者は楽しく見学しながら、中東という地域の歴史の厚み・文化の豊かさにハッと気づかされたり、史跡を見る際に役立つ貴重なヒントを得ることができたりするのだった。

湯川先生とスーダンを訪ねて

一九八五年の十一月、私はエジプトでの約半年の準備期間を終えて、(自分の本来の研究対象である)スーダンにいよいよ現地調査に行くことにした。そのことを湯川先生に伝えると、「一緒に行きましょう。僕もスーダンは一度見ておきたいから」とのこと。半信半疑だったのだが、実際に湯川先生は在カイロ大使館のもう一人の日本人スタッフ(若い男性だったがお名前を失念!)と共に、スーダンまで一緒に来て下さった。

湯川先生はそんなことは一言もおっしゃらなかったが、いうまでもなくこれは、(当時まだ二〇代で、しかもはなはだ頼りない大学院生だった)私のスーダン入りを心配した先生の、せめて最初の数日だけでも同行して「護衛」してやろう、という思いやりから生じた行爲だった。実際、どんなに心強かったことか!ハルトウム空港には夜明けに到着する便だったような気がするが、深夜の旅にもかかわらず、湯川先生と一緒にいたため一切の不安や緊張を感じなかった。機中でも先生は、乗客を観察してエジプトとスーダンの国民性の違いを論じたり(「エジプトの既婚女性は外国人男性と目が合っても無視するが、スーダ

ン人女性は人妻であっても一応ニツコリしてくれる!」、スーダン人の人名の特徴に驚いたり(「先生の席の近くのスーダン人に名を尋ねたところ、「ハサブ・スイヤーダ」というきわめて複雑な名前だった!」)しておられた。ハルトウム到着後は、ギリシア人一家経営の「アクロポール・ホテル」に投宿した。当初は三人分の空室がなく、たしか最初は筋向いの「サハラ・ホテル」と「アクロポール」に分かれて泊まり、その後しばらくして「アクロポール」に合流したような記憶があるが、ホテルとの面倒な交渉もすべて湯川先生がこなして下さったように思う。

湯川先生たちがスーダンにおられたのは数日間だったが、先生の存在ゆえに私が最も恩恵を被ったのは、スーダン到着二日目か三日目(たしか金曜の朝)にウンマ党(「国民党」)本部を訪ねた際である。当時(一九八五年)のスーダンは、一六年間続いた独裁政権ヌマイリー体制が同年四月の民衆蜂起によって打倒され、それまで禁止されていた諸政党が一斉に活動を開始しつつある状況にあり、中でも注目される政党の一つが(一九世紀のマフディー運動の指導者の子孫「マフディー家」を中心とする)ウンマ党だった。私は卒業論文でマフディー運動を扱った関係で、湯川先生たちと共に(ハルトウムのナイル対岸の町)オムドゥルマーンにあるマフディー廟を訪ね、ついでのその近所にあるウンマ党本部の前まで行ったのだが、この時、全く思いがけなく建物内部に招じ入れられてウンマ

党党首のサーディク・アル・マフディー(マフディーの曾孫、首相経験者)と会うことができたのである。

これは私ひとりなら到底無理で、それどころか本部の前庭にたむろしていたウンマ党支持者の人々につまみ出されるのが関の山だったと思われるのだが、身なりの整った日本人男性二人、とりわけスーツ姿にロマンズグレイの映える湯川先生と一緒にいて下さったことが幸いした。白いガラビヤとインマ(ターバン)を身に着けたウンマ党支持者のスーダン人男性が「どちらからいらつしやいましたか?サーディクにお会いになってみますか?」と向こうから——英国仕込みの英語で——話しかけてきて、たしか「外階段」(?)のようなところを通って建物内部に案内してもらったと思ったら、そこはもうサーディク・アル・マフディーが来客を迎える大広間(ディーワーン)だった。純白のインマ・ガラビヤ姿のスーダン人の客人がざらりと席を占めるなか、われわれ日本人三人は特別にサーディクのすぐ隣の椅子に座らせてもらい、サーディクが来客と挨拶を交わす様子を眺めたり、サーディクの前で青年がマフディー家の事績を讀める詩(とおぼしきもの)を披露するのに耳を傾けたりした。——スーダンに着いたばかりの私にとって非常に鮮烈な、まるで白昼夢のような光景だったが、今なつかしく思い出されるのはサーディクの隣で悠然と「学者外交官」風の威厳を漂わせていた湯川先生の姿である。

町と人へのまなざし

スーダン滞在中、湯川先生は町を歩き、ごく普通の市民生活を覗いてみることも重視しておられた。ハルトゥームと一緒に散策していた時、先生が、外国の都市を実際に訪ねてみることの重要性を強調し、「一度でも実際にこうして来ておくと、ニュースで『どこそこの町でデモがあった』などと聞いたときに、具体的イメージが描ける」と言っておられたのは印象的である。また、ハルトゥームで日本人三人それぞれが「自由行動」をしよう、ということになった時、私は史跡見学か書店探しに出かけ、若手大使館員氏はたしかラクダ市場を見学に行ったのに対し、湯川先生は町のモスクに飛び込んでイマームの説教を聴いて来られた。たしかウラマーの役割をサッカーの審判(?)になぞらえて説明する説教だった、ということ、夕方に再会した時、イマームによるアラビア語での説教の内容を楽しそうに紹介して下さったのを覚えていいる。湯川先生はこうして限られた時間でも現代の中東の津々浦々のモスクで実際にどのように「イスラーム」が語られ、実践されているのかを観察している、イスラームの政治思想やウラマーのネットワークをめぐる湯川先生の歴史研究は決して「現在」と遊離したものではないのだ、と痛感させられたものである。

ハルトゥームで数日を過ごしたのち、スーダン最大の綿花プランテーション「ゲジラ計画」の中心地であるワド・マダニーという町にも足を運んだが、湯川先生はこ

れにも同行して下さった。ここでもこの地方都市の街角に、ベレー帽姿で自転車に乗った、意外に洒落た(?) 服装の老人の姿を発見して、スーダン人のファッション・センスについて論評しておられたりしたのを覚えている。

約一週間の滞在ののち、湯川先生はカイロに戻って行かれた。私の方はそのままスーダンでの現地調査に入ったが、最初の一週間のいわば「助走」期間を湯川先生に伴走して頂いたことは、その後の調査・研究の重要な土台となった。

以上が、私が湯川先生と一九八五年に初めてお目にかかり、エジプト・スーダンで一緒に過ごして頂いた際の記録の一端である。今書いていてもなつかしさで一杯となり、かけがえない思い出と実感する。深い感謝を記し、ご冥福を祈ると共に、私たちは先生が残されたものを——学問的業績はもちろん、中東の歴史と社会へのまなざし、人との接し方、「振舞い方」も含めて——今後の日本の中東研究のなかにできる限り活かし、引き継いでいかねばならないと感じている。(了)

早稲田の頃の湯川先生

佐藤 健太郎

北海道大学大学院文学研究科准教授

二〇一四年三月八日、湯川武先生が亡くなられた。先生の体調不良を最初に知ったのは、前年の十二月、年末恒例の『イブン・ハルドゥーン自伝』読書会合席を欠席するとの連絡を受けたときだった。風邪が長引いてということだったが、入院して検査という言葉に胸騒ぎをおぼえた。しかし、わずか四ヶ月後に先生とお別れをしなければならぬとは、そのときは思いも寄らなかった。きつと次の夏合宿の時にはまた元気なお姿を見せてくれるに違いないと信じていた。

私は、「NIHUプログラム イスラーム地域研究」第一期(二〇〇六―二〇一〇年度)の五年間、早稲田大学イスラーム地域研究機構(二〇〇八年まではイスラーム地域研究所)で湯川先生と共に仕事をする機会を得た。その間、先生には語り尽くせないほどお世話になったが、実をいうと、私が先生と親しくさせていたかどうかになつたのは、それほど昔のことではない。二〇〇六年にイスラーム地域研究が始まるまでは、お話しをする機会はほとんどなかったから、一〇年にも満たないお付き合いだったということになる。私以上に湯川先生のことを知っている方は、同世代の研究者や慶應時代の教え子など、数多くいる